

令和5年度 美祢市人権教育ふれあい講座・リーダー講座



共に学び！共に生きる！



～一人ひとりの人権が尊重された心豊かな地域社会の実現に向けて～

【第4講座を開催して】

9月19日（火）に、美東センターにおいて、令和5年度美祢市人権教育ふれあい講座（第4講座）を開催しました。

講座では『子どもの問題』をテーマに、NPO 法人まなびデザインラボ 理事 小松 範之（こまつ のりゆき）氏から、「子どものやる気を1日5分で引き出す『自己肯定感』入門～不登校支援でわかったこと～」と題して御講演いただきました。



講座をとおして、子どもの自己肯定感を醸成していくためには、子どものエネルギーの源となる承認欲求を満たすことが必要であること、そして、そのための言葉がけについて、命令と禁止を許可に言い換えること、「なるほどね」「ありがとう」「いいね」の3つの言葉を伝え続けることなど、具体例や御経験をもとに、わかりやすく教えていただきました。受講者は、これまでの子どもとの接し方を振り返るとともに、これからの子どもとのかかわり方について真摯に考えることができました。

【受講者の主な感想】

- 自己肯定感を高めるためには、承認欲求を満たしてあげることが意識することが大切で、そこに注目した言葉がけが大事であることを知ることができた。私は、小学校の教員で、私の学級には登校を渋る児童がいる。1学期の関わり方は正直言って失敗だなと感じた。2学期にはその児童への見方や考え方を180度変えて関わるようにしていると、少なくとも1学期に比べて笑顔の表情を見ることが増えてきたと感じる。今日のこの講義の内容でも共感できることが多くあり、これからも子ども達の承認欲求を満たしていけるような関わり方を意識して、言葉がけをおこなっていきたい。
- 禁止を許可に置き換えることが大切と思った。
- 子どもができたなら実践してみたいと思った。
- 教員として、親として、とても参考になりました。
- 3つの言葉が使えるようになりたいと思います。
- 心理学を元にした話で参考になった。ありがとうございました。

- 具体的な話で実践できる確信を持てた。
- 承認欲求の大切さに気づいた。
- とても興味深い内容でわかりやすく聞くことができました。
- 子育てをしていますが、自己肯定感を高めてあげるために、今日習ったことを少しずつ実践していきたいと思います。
- 明日からすぐにできることを学べたのでとても良かった。
- 伝える言葉が、なるほどね、ありがとう、いいねの3つに集約されており、気負わずに取り組めそうでよかった。
- 自分が子育てをするなかで、ついつい命令したり禁止したりするような言葉を使いがちになっていたことを反省。〇〇してもいいよ、しなくていいよと言おうと心の中で誓いました。言われて嬉しくなる言葉を伝えるのが大事なんだとよく分かりました。
- とても興味深いお話でした。子供だけでなく大人も高齢者の方にも通じるお話だと思いましたが、大切な家族の中でしっかり実行したいと思いました。
- 内容と講習が分かりやすく、明日から実践できると思いました。
- 自己肯定感を高めるための手立てについて学べてよかった。
- ほぼ子育てが終わっているのも、もっと早く受講出来ていれば子どもへの声掛けが違っていたかもしれません。全て命令と禁止だけで話していました。
- 不登校対応への基本的な構えを学ぶことができました。考える時間が5秒など急ぎ足でしたので、もっと時間があれば、じっくり学ぶことができると思いました。
- 子どもの自己肯定感をあげるための言葉かけについて学べて大変良かった。
- ひきこもりの児童への寄り添い方法はもちろん、自身も子育て中であるため大変参考になりました。具体的な事例などで丁寧に説明頂いたと思います。ありがとうございました。
- 子育てや不登校問題だけでなく、いろいろな場面で応用していきたいと感じました。
- 子どもだけでなく、大人の間人間関係にも、そのまま通じ得る、大変貴重な内容で、ぜひ、今後に生かせれば、と思います。ありがとうございました。
- 自分も子育て真っ最中ですので、家に帰ってすぐ家族に今日の講座の内容を話すことができ、実践できた。いつもうまくいくとは限らないですが、この講座の内容が頭にあるだけでもちがうな〜と、思いました。
- 落ち込んでいる子どもへの声かけの仕方がよくわかりました。
- こどもの自己肯定感をあげるための言葉かけが大切で、どのように声かけをおこなうと良いのかを学ぶことができました。
- 不登校の子ども達への接し方のコツがわかり、とても勉強になりました。またすぐに実践していけるところが良いと思いました。もう少し時間が許せば、まだまだ実りある時間になったと思います。
 - 子どものために今後どのような声かけしたら良いのか分かりました。また実際に、子どもに対して使ってみると、いつもとは反応が違ったので、場合に合わせて使っていきたいと思いました。